

第百九十二話 背信行為、許し難し！

第二次上海事変（1937/8/13～）で、日本軍は約4万名の戦死傷者を出し、苦戦した。この苦戦の要因は色々あるが、中国軍が近代的な軍隊へと変貌していたことが最大の理由である。その陰には中独合作と呼ばれる中華民国と独との軍事・経済的な連携があった。独と日本は友好国ではなかったのか？

1 中独接近

軍の近代化が必要な中国と資源（特にタングステン）の安定供給が必要な独の利害が一致しての中独接近となった。1920年代後半から軍事顧問団が形成され、これ以降独の最新兵器が中国に供与されるようになった。第一次上海事変（1933/1/28）では、独軍の指導を受けた2個師団が参戦した。



2 独の軍事援助

1933年5月、独の元陸軍参謀総長であったゼークトが、蒋介石の経済・軍事の上級顧問となった。ゼークトは軍事改革を進めるとともに、『日本一国だけを敵とし、他の国とは親善政策をとる』ことも進言した。独製武器を装備した20個師団の創設、教導総隊の創設、各軍学校創設を推進した。中国内の独産業統括会社の創立、中独協定による鉄道開発、更には「軍事産業三ヵ年計画」、中国軍備拡張計画等々を推進した。

注目すべきは、ゼークトの後を継いだファルケンハウゼン中将が、1935年10月に「漢口と上海にある租界地の日本軍を奇襲し、主導権を握る」ことを進言し、翌1月には対日戦に踏み切るべしと進言したことだろう。主敵の転換が行われた？

独軍の軍事援助は、人材育成と組織整備だけではなく、軍需物資提供にも及んでいた。小銃、機関銃、迫撃砲、山砲、装甲偵察車等で中国軍の近代化は急速に進展した。

国民革命軍の内、8個師団は、ドイツ式に訓練されて革命軍の主力となった。

3 中国軍の対日戦準備の推進

1934(S9)年、蒋介石は上海・南京間の陣地構築を始めた。上海から南京の間に3線のトーチカ群（淞滬線、呉福線、錫澄線）を構築し、これらはヒンデンプルグ・ラインとも呼ばれた。杭州湾正面にも三線陣地が設けられた。縦横に走るクリークと点在する部落の民家を掩蔽壕とし、有刺鉄線を設け地雷を敷設して、部落が要塞と化し、それらが2～300m間隔で接続されていた。

4 日本軍の苦戦と増派決定そして革命軍潰走

8月23日、日本陸軍上海派遣軍の二個師団は上陸に成功したものの、橋頭保を確保したのみで戦線は膠着、進展しなかった。為に、大本営は更に第10軍（三個師団等）を増派し、軍は杭州湾に上陸した。10月26日要衝大場鎮を奪取し、上海を制圧できた。

5 戦力の逐次投入と批判することは容易いが、第二次上海事変は支那事変のターニングポイントともなった。日本は上海付近の兵要地誌を掌握できず、独軍顧問団についての正確な情報も把握していなかった。舐め切っていたのか？何れにしる、これ以降日本は支那から抜けられなくなったのだ。

日独防共協定は、1936(S11)年11月に締結されており、日独は少なくとも友好国ではなかったのか？そして日本はこのような国と三国同盟を締結（1940/9/27）してしまうのである。三国干渉を行い、第一次大戦で日本は独に宣戦し、戦後独領は日本の信託統治領となった事等を考えると、独には反日感情があった（?）。また、中独貿易も盛んになり、中国に対する親近感が増していた。ヒットラーには人種差別意識が強かったとも。ヒットラーが対ソ戦略を意識すると中国援助は下火にはなったようだが、・・・

日本の度重なる抗議を受けて、独顧問団は1938(S13)年6月24日帰国することとなった。独にも弄ばれたか？